

第2回 夜勤業務の未来を変えるテクノロジー——安心・ゆとり・生む見守りの新潮流

■疲弊する夜勤現場

夜勤職員は、精神的にも肉体的にも大きな負担を抱えています。入居者が転倒していないか、体調に異変がないか、呼吸に問題がないか——こうした不安を常に抱えながら、夜間の巡回を繰り返しています。ある特別養護老人ホームでは、夜勤帯に2万歩(約15キロメートル)も歩く職員がいるというデータもあります。過度な負担は、ストレスや

疲労の蓄積、離職の要因にもなりかねません。夜勤業務そのものの改革が不可欠です。

■現場とテクノロジーで進めた夜勤改革

広島県の「介護DX先進モデル施設育成事業」に選定された社会福祉法人尾道さつき会(広島県尾道市)では、夜勤業務を変えるテクノロジー導入に取り組んでいます。同法人の特養星の里が直面していたのは、夜勤巡視で50メートル以上の長い廊下を何度も往復することによる著しい身体的・精神的負担でした。特に、コールが鳴ってから入居者の元へ駆け付けるまでに転倒・転落が起きてしまうリスクや不安は、職員にとって深刻な問題でした。



ホコリをかぶらない！
ICTの選び方

広島県の「介護DX先進モデル施設育成事業」に選定された社会福祉法人尾道さつき会(広島県尾道市)では、夜勤業務を変えるテクノロジー導入に取り組んでいます。同法人の特養星の里が直面していたのは、夜勤巡視で50メートル以上の長い廊下を何度も往復することによる著しい身体的・精神的負担でした。特に、コールが鳴ってから入居者の元へ駆け付けるまでに転倒・転落が起きてしまうリスクや不安は、職員にとって深刻な問題でした。

の信頼を得られず、「人の目」に依存する状態が続いていました。そこで今回は、これまでの機器が現場に受け入れられなかった理由——「転倒・転落時にスマートフォンを操作して確認しなければならぬ」「転倒・転落が多い共用スペースの見守りができない」——を踏まえ、「転倒・転落発生時に音声ですぐにアラートを受け取れること」「居室のみならず共用スペースも映像で見守れること」など、現場が本当に必要とする要件を整理しました。

「夜勤巡視の廃止」を目指し、同法人では異なる見守りの機器を2度導入して試行錯誤しましたが、反応精度や操作性の問題から職員

要件に合致する機器を複数リストアップし、メーカーへのヒアリングや2週間のトライアル、さらには先行的に機器を導入している

導入の前に機器に求める要素絞り込みを

■尾道さつき会の事例



「令和7年度介護DX普及推進セミナー資料(社会福祉法人広島県社会福祉協議会)」に基づき日本総研作成

県外施設への見学を経て、最適な見守りシステムの導入を決断。決め手は煩雑な操作を必要としないシンプルなUI・UXでした。これにより、現場の職員がテクノロジーをストレスなく受け入れやすくなったことが、定着の大きなポイントとなりました。

新システムの導入とともに夜勤巡視廃止を前提とした業務ルールを設定した結果、2ヵ月後には特定ユニットにおいて夜勤シフトあたりの巡回時間が221分から半分以下に短縮(図表)。夜勤者の休憩・待機・仮眠

時間が50分増えたほか、職員の身体的・精神的負担が大幅に軽減され、利用者支援や施設運営について考える余裕も生まれています。

転倒等の事故対策業務も大きく変化しました。以前は、夜間に利用者が居室内で転倒した場合、職員の推測で記録するしかありませんでした。しかし、映像で事故の状況を確認できるようになったことで、転倒の原因が明確になり、再発防止策を適切に講じることができるようになりました。

施設長の山下清文氏は、「テクノロジーの導入目的は、単なる業務効率化にとどまりません。現場の働き方そのものを変えることができるかを見極め、経営判断として新システム導入を決定しました」と語ります。

■夜勤業務の未来を変えるテクノロジーにニーズ
今後、夜勤業務の極小化を目指すテクノロジーの開発で特に期待されるのが、複数の利用者を一元的にモニタリングできる「セント

ラル見守りシステム」です。「見守りを担当する職員」と「その職員から指示を受けて実際にケアを行う職員」という役割分担が可能になり、経験豊富な職員がいない場合でも、効率的かつ効果的に夜勤業務を行うことができます。1人のリーダー職員が複数のモニターで施設全体を見守り、インカムで新人職員に指示を出す——こうした運用をす

でに始めている施設もあります。このシステムを応用すれば、遠隔地からの見守りや、施設や在宅で暮らす複数の高齢者の状況を一元把握できる仕組みも現実味を帯びてきます。

重要なのが、高齢者の尊厳に対する配慮です。カメラ映像ではなく、画質の調整やシルエット・アイコンでの表示など、個人情報やプライバシーの配慮が各メーカーから提案されています。高齢者の尊厳を守りつつ、より安心で安全な夜勤の実現で夜勤業務の未来が大きく変わるでしょう。

日本総合研究所 リサーチ・コンサルティング部門
高齢社会イノベーショングループ
マネジャー 城岡 秀彦



富山県出身。2016年(平28)京都大学卒業後、京都大学大学院医学研究科修士課程を修了。日本・シンガポールでの病院勤務を経て、日本総研入社。理学療法士としての経験を活かし、介護テクノロジー開発を中心とした調査研究・コンサルティングに従事。